

## エカテリーナ二世期の ロシア・ドイツ学术交流覚え書

— アッシュ・コレクションとA.L.vonシュレーツァー —

土 肥 恒 之

### はじめに

1762年6月のクーデタによって帝位に就いたエカテリーナ二世（1729-1796）は「啓蒙君主」としてその名を高めたことは広く知られている。女帝は当時の時代精神ともいべきフランスのフィロゾーフたちの思想を利用しながら改革を進め、それを通して「正統的」とは言えない自己の権力の安定をはかっていった。彼女は即位以前からモンテスキュー、デイドロ、あるいはジョン・ロック等の本を読んでいたから、それを付け焼刃と言いつてはできない。ただその方法はきわめてプラグマチックな借用であった。この「帝位の啓蒙家」はもともと宣伝癖が強かったのである。なかでも注目を浴びたのは新しい立法委員会の招集（1766年12月）、そして会議の開催にあたって読みあげられた『訓令』（ナカーズ）であった。

全体で22章655項目からなる『訓令』は、エカテリーナの統治理念をうたいあげたものだが、予めヨーロッパ諸語に翻訳されていた。そのなかで女帝は、ロシアのような広大な国家には専制君主による統治が相応しいとして自己の権力を正当化するとともに、一方で市民の自由、法の前での平等などの理念を掲げた。だが『訓令』は全体の四分の三が西欧のフィロゾーフたちの著作からの借用、しかもほとんどコピーに近かったこともはやくから明らかにされている。特に彼女の「枕もとの書」であったモンテスキューの『法の精神』（1748）からの引用が多くを占めたが、ベッカリーアの『犯罪と刑罰』（1750）からも少なくなかったのである。

彼女の立法委員会がオスマン帝国との戦争の勃発のため中断されてから5年後の1773年10月初め、今度はパリから賓客ディドロがペテルブルクに到着した。「君主と相談役としての哲学者」という古代ギリシャに由来する観念から、ディドロはエカテリーナの招聘に快く応じたのである。予め用意してきた『覚書き』を手に翌年3月初めまで、ほぼ2、3日おきに午後の2、3時間、女帝と差し向かいの対談をしたと伝えられる。代議政体の確立、教育制度の改革、官職就任への試験の導入等さまざまな提言がなされたのだが、ほとんど実を結ぶことはなかった。けれどもピョートル大帝即位百年にあたる1782年に除幕され、いま現在も多くの観光客がその場を背景にして記念写真を撮る「青銅の騎士」像の製作にあたった彫刻家ファルコネを女帝に推薦したのはディドロであった。

以上の二、三のよく知られた例から、女帝エカテリーナの啓蒙政治については専ら、そして長い間フランスのフィロゾーフたちとの関わりで語られてきた。その事実は間違いではないにしても、かなり一面的だというのが現代の史家たちの判断である。そもそもフランスの思想と文化がロシアに流入するのは18世紀半ば以降のことだが、その受け入れはきわめて表面的であった。他方でロシアに根を下ろした最初の「西欧文化」はドイツ人経由であり、18世紀を通してドイツの影響が薄れることはなかった。<sup>①</sup> 周知のようにエカテリーナはドイツからロシア皇太子に嫁いできた生粋のドイツ人であるが、母国との関わりについて最近まで深く考察されてこなかった。以下ではこれらの点について二つの事例を取り上げ具体的に見ることにするが、いずれもかなり大きな問題である。問題の所在を整理すること、覚え書の狙いはこの点にある。

### (一) モスクワのドイツ人

1652年、つまりピョートル大帝の本格的な改革が始まる半世紀前、モスクワ郊外に「外国人村」が設けられた。父帝アレクセイの時代にヨーロッパか

ら雇われて、あるいは機会を求めてロシアにやってきた軍人や商人等とその家族は少なくなく、多くはプロテスタントであった。だがモスクワ市中への彼らの散住は間もなくロシア人との間で宗教上のあつれきを引き起こした。そのためアレクセイ帝は郊外のヤウザ川の畔に「外国人村」を設けて彼らを移住させたのである。全体で約1200人に及んだこの村にはルター派と改革派の二つの教会も建てられ、酒場もできた。村の運営は彼らの自治に委ねられ、ロシア政府や正教会の干渉もなかった。「外国人村」は小規模とはいえ、外観といい、生活のウクラードといい、「正教のモスクワ」とは明白に異なる西欧の町そのものであった。1682年にはカトリック教会も出来たのである。

「外国人村」の最大の集団は、初期のオランダ人を別にすると、ドイツ語圏からきた人々であった。彼らは医者、薬剤師、博士、陸海の軍人としてロシアで「国家勤務」に就いていた。手工業者も増えていた。「大使節団」の派遣を経て大帝の改革が本格化すると外国人の雇用は更に増加した。1702年のマニフェストで、大帝は国家勤務という形式だけでなく、ロシアでの外国人の自由な活動を認めた。信仰の自由も認められ、出国のさいの障害もなくなった。こうしてドイツ人の自発的な移住が始まり、「外国人村」に住む人口も増加した。1719年に全国の都市を統括する「都市総局」がモスクワに置かれ、「外国人村」はモスクワ市の一部となった。その住民も市民に編入されたが、従来の自治権が侵害されることもなかった。信仰の自由は維持され、税制上の諸特権も保たれたのである。大帝が目指した西欧風の首都ペテルブルクが出来た後も、流出は一部分に限られていた。新しい首都はまだよく整備されておらず、物価も家賃も高かった。何といてもモスクワと違って気候がよくなかったからである。

こうして一世代だけでなく、その後もモスクワに住み続けた「古いドイツ人たち」は故郷との絆を絶つことはなかった。知り合いの商人等を通して手紙を交わし、贈り物を交換してさまざまな情報を手にいれた。またロシア新政府の許可を得て、自分の故郷を訪問することも出来た。そこで病身の親を見舞い、相続をはじめプライベートな様々の問題を解決できた。「モスクワ

のドイツ人たちは」は仕事上の旅行、頻繁な文通、そして故郷訪問を通じて「非公式なかたち」でロシアとドイツ語圏の情報交換の役割を担うことになったのである。加えて経済的に余力のあるロシア在住のドイツの商人、起業家、宮廷付医官、貴金属商等は、これも政府の許可を得て、自分の息子たちを外国に送った。ロシアでは得られない大学教育や職業・技術獲得の機会をドイツに求め、帰国後みずからの後継ぎとするためである。政府はロシア生まれの彼等を優先的に「国家勤務」に採用した。若いドイツ系ロシア人たちはドイツでの修学時代にヨーロッパで流行の新しい思想に触れ、それをモスクワに持ち帰った。もちろん逆のケースもあった。ロシアの人びととの交流はロシアの国と人への関心を呼び起こしたが、特にドイツではそうであった。ロシアの歴史、文化、宗教等に関する諸史料、文献の蒐集が新設のハレ大学、ベルリン・アカデミーで始まった。そこには希少な手書本、年代記、地図資料、あるいは古銭などの珍品類まで集められた。<sup>②</sup>

以上のように、モスクワの「外国人村」のドイツ人、そして後継のドイツ系ロシア人が果たした役割は重要なものであった。そのことを踏まえて、この動向をもう少し一般化しておこう。18世紀を通じてドイツの動向は、直接あるいは間接にバルト海沿岸地方のドイツ人、いわゆるバルト・ドイツ人を通してロシアに流入した。18世紀初めの併合以来彼らの役割は大きくなった。ピョートル大帝はドイツの哲学者ライプニッツ（Leibniz, Gottfried von, 1646-1716）の提言を受けて、科学アカデミーの設立に踏み切った。それは18世紀を通してロシアの学問の拠点となったが、会員はすべてドイツ語圏からきた学者であった。大帝は諸々の資源の発見、その調査・研究を目的とする「地理」そして「航海」に優先権を与えていたが、アカデミーに招かれた学者たちは帝国に暮らす諸民族の生活にも強い関心を寄せた。いずれにせよ、本格的な学術・研究がドイツ人学者を中心に始まったのである。

この動向はその後も変わらなかった。1755年に開校したモスクワ大学の10講座の教授のうちロシア人は一人だけで、他はドイツ系の学者であった。18世紀後半に在職したこの大学の外国人教師23名のうち、20名がドイツ人で

あった。残り3名がフランス人であるが、彼らはドイツ人のように専門分野ではなく、フランス語の教師として招かれたのである。新しい首都としてのサンクトペテルブルクの役割は固まり、外国人の割合は人口の八分の一に達した。だが最も多いのはドイツ人で、圧倒的にプロテスタントであった。リガがドイツ語の本の出版中心地となり、ドイツ語の書物を手にいれるのはフランス語よりも、はるかに容易であった。ロモノソフ、デルジャービン、カラムジーン等のロシア指折りの文学者たちはフランス語以前にドイツ語を知っていた。エカテリーナの寵臣オルローフ兄弟、ヴァゼムスキー伯爵はドイツ語しか知らなかった。多くのロシア人学生はドイツの大学に留学した。フランスの大学にいくものもいたが、多くはドイツ語が使えるプロテスタントのストラスブルールに行ったのである。<sup>③</sup>

1996年刊行の『エカテリーナ二世—ドイツとドイツ人—』の著者シャルフはエカテリーナ二世をロシアとドイツという二つの異なる言語的空間における文化的・学術的諸関係の媒介者とみて、多くの具体的事例を列挙している。「はじめに」で指摘した『訓令』におけるモンテスキューの影響についても、エカテリーナは彼が「中間的諸権力」に高い評価を与えている点に懐疑を抱いて、平行してドイツの思想家たちの著作に眼を向けたことを具体的に指摘している。またエカテリーナの文学的好みはフランスの古典文学者やヴォルテールに影響されているが、ドイツの風刺的ロマンにも生きいきとした関心を示し、その著者たちとコンタクトを取っていた。このように女帝は決してフランス一辺倒ではなかったのである。<sup>④</sup>

## (二) ゲッティンゲン大学とアッシュ・コレクション

1737年に領邦ハノーファーに設立されたゲッティンゲン大学は、ハレ大学(1694)と並んで「近代大学の嚆矢」とされている。それは中世後期以降の「宗派大学」とは異なり、領邦君主ハノーファー公によって創設された大学であった。大学の勅許状には、教師たちは「公的にあるいは私的に教えるこ

とのできる完全に無限の自由と権能をもつ」と明記された。つまり「教育の自由」が保証され、教授用語としては、従来のようにラテン語ではなく、ドイツ語使用が許された。ゼミナール制度が優位にたち、精選された私講師たちが講義を担当して将来の大学教授の苗床となったのである。<sup>⑤</sup>

こうしてゲッティンゲン大学はドイツ各地から大勢の学生を引き寄せたのだが、次のような事情も有利に働いた。当時ハノーファーはイギリスと同君連合にあり(1714-1837)、当初から英語と英文学の講義が開かれていたし、図書館では積極的にイギリスの最新の文献を集めていた。ゲッティンゲン大学にはイギリスから王侯・貴族の子弟が学びに来ていたから、教師たちはイギリスについての知識、思想を得ておこうとする意欲が強かったのである。例えば1776年に出版されたアダム・スミスの古典的名著『国富論』のドイツ最初の書評の著者はゲッティンゲン大学教授フェーダー(1740-1811)であった。またフェーダーの弟子ゲオルク・ザルトーリウス(1765-1828)は歴史学の担当であったが、スミスによる「真理の発見」を確信して、彼の経済思想の普及をみずからの義務と考えたという。

教授陣も多彩であった。医学部教授ブルーメンバッハ(Blumenbach, T.F, 1752-1840)は、解剖学から頭蓋骨の蒐集にすすみ、男女、時代、人種の相違を明らかにしたが、それだけでなく世界各地の住民の生活慣習や文化器具を蒐集した。世界探検家フォルスター(Forster, J.G, 1754-1794)から蒐集品の寄贈を受けて、それらを併せて大学博物館を設置、みずから初代館長となった。哲学部で彼が担当した「自然誌」はゲッティンゲン大学の名物講義であり、聴講しなかった学生はいなかったと伝えられている。大学では哲学部を専門学部進学のための下位学部と位置づけなかったため、全ての学生が履修できたのである。他に「統計学の父」と呼ばれたアッヘンワール(Achenwall, G 1719-1772)がいた。統計学といっても所謂「記述統計学」(別称「国状学」)で、人口、土地、生産物、貨幣等の基本統計についての数量的観察を不可欠とするものであった。『神の秩序』(1741)を著したジュースマルヒ(Süßmilch, J. P, 1707-1767)の研究成果をも受け継ぐものである。他方で、ゲッティンゲ

ン大学で1749年に初めて「旅行学」を講義したのがケラー（Kohler,J.D）で、彼は『旅する学生のための手本』（1762）を著したのである。

以上のような多彩なスタッフを擁するゲッティンゲン大学の図書館に、1771年からほぼ30年間にわたって、主にシベリアと北アメリカのアラスカ諸地方に関するさまざまな資料を寄贈していた卒業生がいた。ゲオルク・トーマス・フォン・アッシュ（Asch,G.T.von 1729-1806）である。それは後に「アッシュ・コレクション」として斯学に広く知られただけでなく、ゲッティンゲン大学の「名声」を高めたのである。ではアッシュとは一体何者なのか。<sup>⑥</sup>

ゲオルク・アッシュは1729年4月ロシアの首都サンクトペテルブルクに生まれた。父親フリードリヒ（1690-1771）はシュレーゲエンの出身で、1707年にロシアに移住したドイツ人である。時のツァーリ、ピョートル一世（1721年に皇帝、大帝の称号）に郵政長官として仕え、ロシアの郵便制度の近代化に努めた、いわば「お雇い」外国人であった。1762年に引退して貴族の称号を授けられ、北ロシアのドヴィナ地方に領地（11ヶ村）を手に入れた。したがって息子のゲオルク・アッシュは、正確にはドイツ系ロシア人である。彼は6人兄弟で、家庭教育を受けた後ペテルブルク科学アカデミーの附属ギムナジウムを経て、16歳で勉学のためにドイツに向かった。まずチュービンゲン大学に入って、ここで4年間（1744-1747）医学の勉強をしたのである。

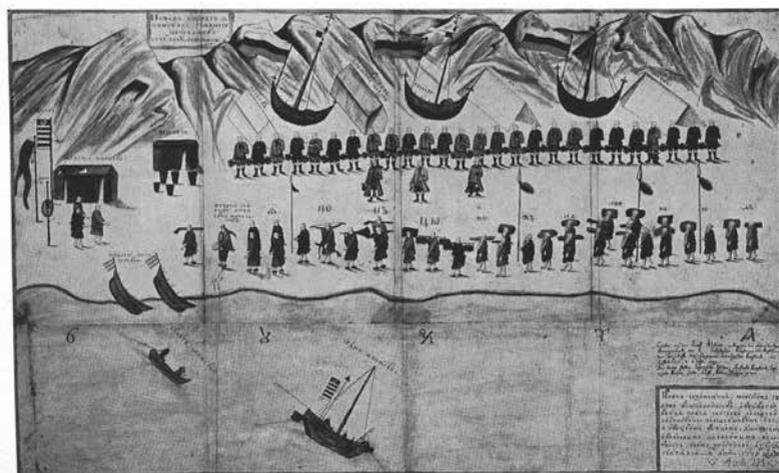
1747年12月ゲオルク・アッシュはゲッティンゲン大学に移った。ここでは著名な自然科学者、ヨーロッパ医学の権威ハーラー（Haller,A 1708-1777）に師事して、1750年に医学博士の学位を得ている。こうしてドイツでの学業を終えたゲオルクはペテルブルクに戻って国家勤務の生活に入った。ロシア生まれのドイツ人は、先にも述べたように歓迎されたのである。まず首都の医務官となり、1760年には陸軍軍医総監に就任という目覚ましいキャリアをつんだ。1763年に女帝エカテリーナによって医学参議会（Medical Collegium）の最初のメンバーに抜擢された。いわゆる露土戦争（1768-1774）では軍医として従軍し、モスクワでのペスト（1770-1772）の発生の折には文字通り

陣頭指揮にあたったことも知られている。1777年に国家政治顧問に就任したが、亡父フリードリヒも晩年にはプロテスタント教会の世話役として首都のドイツ人社会の名士として知られていた。ペテルブルクには当時1万7000人のドイツ人がいたとされるが、アッシュ家はその枠を超えて、ロシアで広く知られた存在であったのである。

さてゲオルク・アッシュがゲッティンゲン大学に寄贈を始めたのは1771年のこととされるが、6年後にゲッティンゲンの「学術協会」の在外会員に選任された。協会は大学と密接な関連をもつ団体（創立は1751年）で、物理学、数学、そして歴史・文献学の三部門があった。この協会のトップが学生時代に師事したアルブレヒト・ハーラー教授であった。またアッシュと古代言語学教授ハイネ（1729-1812）との親密な手紙のやり取りも知られている。ゲッティンゲン学術協会はアッシュの学術的貢献を認めて、彼を在外会員に選出したのである。このような大学と協会との密接な関係、そしてその活動はゲッティンゲン大学の名声を決定的にしたともいわれるが、在外会員アッシュの三十年にも及ぶ寄贈行為はそれを下から支えるものであった。1779年から20年間に16名のロシア関係者が、アッシュの推薦で学術協会の在外会員に就任したといわれる。

さてアッシュ・コレクションの内容は多様であるが、アッシュ個人の書類を除くと、①各種の記録類（シベリアの天然痘患者調査、ネルチンスクの鉱業活動表、ピリングス探検隊への指示書、カディヤク島宣教報告）、②手書き地図類（カフカース周辺、シベリア各地、トボリスク以東の地図、アラスカ探検図等）③標本類（隕石等の鉱物、孔雀石、宝石や貴石類、解剖学用の人骨、特に各民族の頭蓋骨、植物、球根や種子類）、④貨幣・メダル類（ロシア、タタール、ペルシャ、中国、インド他の貨幣、グルジア出土の古代貨幣）、⑤書籍約750点、⑥絵画類（水彩画、素描、銅版画）⑦各民族の民芸品（ツングース、ブリヤート人たちの護符、衣装）がある。

コレクションのなかで最もよく知られているものの一つは、南東シベリア出土のツングース（エヴェンキ）のシャーマンの衣装であるが、ゲッティン



「図版 アッケシにおける日露会見図（1779年）」

ゲン大学で長く医学部教授の職にあったブルーメンバッハ（1752-1840）は、すでに述べたように頭蓋骨のコレクションで知られていた。彼はアッシュュにロシア人とアジア人の頭蓋骨を求め、22体を入手したという。他方で、コレクションには日露関係史料11点が含まれていたが、ここでは「アッケシにおける日露会見図」を取り上げることにしよう。<sup>⑦</sup>

「アッケシにおける日露会見図」（51×86cm）は、正確には「パーヴェル・セルギエフ・ラストチキンの先導者であるイルクーツク商人デ・ヤー・シャバリンが1779年9月6日、自身がアトキス島滞在中に作製した図」というタイトルである。「アトキス島」というのは「アッケシ（厚岸）」のことで、筆者が「島」と誤解したのである。それはともかく、この絵を描いたというシャバリンは「イルクーツクの商人」とされ、「先導者」つまり「水先案内人」を兼任していた。<sup>⑧</sup> アッシュュがどのような経緯でこの絵を入手できたのかは不明である。すでに指摘したように、18世紀後半のロシアにはドイツ語圏出身者は少なくなく、しかも各分野で活躍していたから、アッシュュの依頼に快く応じて、学術的価値があると思われる品々を探し集めてアッシュュに、時に

は直接ゲッティングエンに送っていたものもいたであろうことは容易に推測される。

この絵画資料は一目瞭然で、細々と説明するまでもないが、ここでは日本人最初の「発見者」である奥平武彦に敬意を表して、彼の詳しい紹介をそのまま見ておくことにしたい。<sup>9</sup> 奥平によると、この絵は「頗る巧手の筆になる行届いた着彩画」で、図のなかの人物・家屋・船舶についてのロシア文の説明もある。前景に海、背面に山を描き、中央に海岸線を左右に長く引いている。山手に三隻のロシア船が陸上げされ、旗でもって所属が明示されている。船の左右には二種の形の天幕4個があり、その前面にロシア人26名が一行に居並ぶ。更に列外に3人の統領格が立ち、いずれも右手に帽子をとり、左手を胸に当てて厳粛に今上陸した日本官吏一行に敬意を表する姿勢を取っている。列外のうちの2人が恐らくラストチキンと図の筆者のシャバリンであろう。海面をみると、松前藩の旗を掲げた船が錨を下ろし、傳馬船が浮かび、岸に2隻の松前藩の旗がある船が繋がれている。これらの船を下りて上陸した松前藩吏の一行は、鉄砲を担ぐものを先払いとして、軍扇をひらく上役、続いて4人の下役、槍弓矢鉄砲用の箱を担ぐ従者14人、後尾に槍や行李をもつ20人のアイヌを随えている。一行の行く手には松前藩の旗提燈をつけた竿頭と二つの番小屋があり、そこから3人の日本人が出迎えている。これは言うまでもなく、此の地が松前藩の領土であることを「観者に印刻せしむる」が故である。列をなして会釈する総勢29名のロシア人とその前を肅然と威儀を正して行進する34人の松前藩の一行、「まことに生けるが如くその日の光景を現出せしめている」というのが奥平の意を尽くした説明である。

更に、奥平は安永8年の「日露の会商」の経緯を簡単に述べた後で、「史籍の傳ふるところによればこの画は2部作製され一を日本側に交附されたが、それが失われた今まことに貴重なるものとせざるを得ぬ」と記している。確かに「交附された」とすると、受け取ったのは松前藩の役人となるが、その行方は今に至るまで明らかにされていない。<sup>10</sup>

他方で、アッシュによるこうした蒐集活動、そしてドイツの大学への送付

は、決して好意的に見られたわけではなかった。18世紀に「大挙して襲来した」「欲張りで、傲慢なエセ教養派外国人」によるロシアの貴重品の盗み、というネガティブな評価がいまもないわけではない。だが大英博物館の設立（1759）に示されるように、それ以前から先進諸国の学者たちによる世界の「文化遺産」の蒐集はヨーロッパ流行の「思想」の産物であった。<sup>⑩</sup> アッシュによる資料の寄贈は1805年頃で終わり、間もなく亡くなった。父親とは違い、ゲオルクは生涯、独身を貫いた。享年77歳であった。

### （三） アウグスト・シュレーツァーのロシア

「近代歴史学の祖」はベルリン大学のレオポルド・フォン・ランケ（1795-1888）である。これがランケの最後の弟子で、「お雇い」ドイツ人リースを通して史料批判の方法を継受した日本の歴史学の常識であった。ランケは彼以前の歴史家に見られた史料批判の不徹底、弱点を暴くこと、さらに研究の対象に国家を据えて政治と政治家に重点をおく「近代歴史学」の基礎を築いたというわけである。そのランケが直接批判的としたのは所謂「ゲッティンゲン学派」であった。この学派の関心は多様で、社会や経済にも向けられていた。また比較史に対する関心も強かったが、史料批判という点では弱点があった。この点を衝いたのがランケで、彼はそれによって学派がもっていた歴史への多様な関心をも洗い流してしまったという批判もある。では具体的にゲッティンゲン学派とは誰を指しているのだろうか。その筆頭に挙げられるのがシュレーツァーなのである。<sup>⑪</sup>

アウグスト・シュレーツァーは1735年ヴェルテンベルク北東にある村のルター派牧師の家に生まれ、ギムナジウムを経てヴィッテンベルク大学神学部に進学した。当然の如く牧師の道が択ばれたわけだが、そこで受けた講義から文献学的な関心が芽生えた。こうして1754年、かれはゲッティンゲン大学で比較言語学の権威、教授ミヒャーエリス（Michaelis, J.D）に師事したのである。教授の授業の人気は高く、私講義の学生授業料収入が多額にのぼった

ため、市内に「幾つかの家を購入し、講義室と学生下宿に利用した」という。その後主に学資稼ぎのため滞在したスウェーデン時代（1755-1759）を経てゲッティンゲンに戻ったシュレーツァーに対して、ミヒャーエリスはロシア科学アカデミーに在籍する歴史家のミュラー（Muller, G.F. 1705-1783）の家庭教師兼助手の職を推薦した。こうして1761年サンクトペテルブルクにやって来たシュレーツァーは、スウェーデンでの体験もさることながら、ロシアの地で「忘れがたい新しい刺激を受けとり、視野を拡大した」のである。<sup>⑬</sup>

ミュラーの下でロシア史の基礎史料の蒐集・刊行の仕事を手伝うなかで、シュレーツァーは原典研究の重要性を学ぶとともに、みずから中世史料『ネストル年代記』の考証とドイツ語訳にのりだした。またロシア帝国の地理と統計にかんする出版を準備した。さらに貴族寄宿学校のラテン語教師を務めるなかで、週三回統計学の授業をすることで、この分野についての理解を深めた。これはロシアの人口動態統計の作成への関与となった。女帝エカテリーナに対してロシア統計局の設立の嘆願は実を結ばなかったが、統計学に対する関心は更に強められたのである。こうして6年の歳月が過ぎた1767年、シュレーツァーは病気のため一時帰国をしたが、1769年3月ロシア科学アカデミーに辞表を提出した。そしてゲッティンゲン大学で北欧史・ロシア史、さらに一般世界史を教えることになったが、それも東の間急逝したアッヘンワールの後継者として統計学の教授に就任するのである。37歳のときで、その後30年以上（1772-1805）に渡ってその職に留まった。<sup>⑭</sup>

シュレーツァーは帰国後すぐに『新たに変わったロシア』（リガ、1767-68）を刊行した。筆者未見だが、そのタイトルからピョートル大帝の時代にロシアに滞在したハノーヴァーの使節フリードリヒ・ヴェーバーの評判の『変わるロシア』（1722-1723）を意識したものと推測されるが、その後も一貫してロシア史に対する関心を維持した。『一般北方史』（ハレ、1771）ではスカンディナヴィアからバルト諸国、ポーランド、そしてロシアを扱った。講義ではアッヘンワールの後任として統計学を論じたが、この大学で最初に「旅行学」を講義したケラーの後を受けて、定期的に「陸路および海路の旅行」

を論じたことが知られている。聴講生によると、シュレーツァーの外国（旅行）事情は、「外国旅行が出来る余裕のある学生向けなのかもしれないが、授業内容は旅行案内書の手記に書かれているようなものではなく、未知の土地の慣習、自然条件、その土地の現状を扱うものである。特に各国の現代史と統計的・政治的分析が素晴らしい。この私講義の聴講生は24名で、週二回、聴講料は1ルイスドルである」。<sup>⑮</sup>もとよりロシアの歴史そのものを論じた形跡はないが、19世紀初めには長年に及ぶ原典、写本等の比較検証の成果として、『ドイツ語訳原初年代記』全5巻（ゲッティンゲン、1802-1809）を刊行したのである。この点については旧ソヴィエト史学でも、また現在でも高い評価がある。<sup>⑯</sup>

1765年1月、シュレーツァーが5年の契約の途上、休暇でドイツに戻ったとき、ゲッティンゲンに4名のロシア人学生を伴っていた。ゲッティンゲン大学の最初のロシア人学生は1751年にやって来たデミドフ男爵の息子たちとされるが、その後途絶えていた。当時ロシアの貴族たちに子弟をドイツの大学で教育を受けさせる希望があり、1760年代後半に一つのピークを迎えていたという。科学アカデミー附属のギムナジウムを出た学生たちの定期的留学もみられ、ゲッティンゲン大学の側にも「ロシア学の拠点」とする希望があったという。こうしてシュレーツァーの帰国は、事実上ロシアとゲッティンゲン大学との間の「間断なきコンタクトの始まり」となった。シュレーツァーはロシア人学生のために下宿を借りた後、大学に伴い登録の手続きに立会った。ガッテラー、ハイネ、ケストナー等の受講すべき講義を勧め、みずからも彼らの教育にあたった。翌年にはモスクワ大学に神学部をつくる計画のために、宗務院から派遣された5名の学生がやってきた。シュレーツァーは彼らに対しても同様の世話にあたった。こうして1766-67年、ゲッティンゲンの戻ったシュレーツァーの周囲に、彼の元（大学、そして家庭）で学び、個人的にも彼と緊密な関係にあった10名程のロシア人留学生グループが形成されていたのである。<sup>⑰</sup>

1770-1790年代、ゲッティンゲンのロシア人学生は以前通りシュレーツァー

の「私的な奔走」の対象であったが、新しい状況が生まれた。大学で歴史学、文献学、政治学を学んだハイム（Heim, Bernhard 1759-1821）は卒業後ハイネ教授の助手をしていたが、1779年名門貴族ロプーヒン家の家庭教師としてロシアに渡った。貴族寄宿学校やモスクワ大学で講師としてドイツ語や古典古代を教えていたが、1784年にハイムは世界史と統計学を教える員外教授、二年後に正教授となったのである。1789年に刊行した彼の『ドイツ人のためのロシア語』は版を重ね、『詳解ロシア国家地誌及び統計的記述』は一千頁を越える大作であった。

他方で父親と同じくゲッティンゲン大学で学び、1796年に法学の学位を取得していたシュレーツァーの息子クリスチャン（Schlözer, Christian 1774-1831）は、父親との不和もあって、ハイムの世話でモスクワに向かった。そこで家庭教師をしていたのだが、1801年モスクワ大学総長イヴァン・トゥルゲーネフ（1752-1807）によって政治経済学の正教授に任用されたのである。トゥルゲーネフは1796年12月に総長就任以来、すでに数人の学者をゲッティンゲン大学から招聘していただけでなく、後に4人の息子のうち2人を同大に留学させるほどの「ゲッティンゲン鼻眞」であった。息子クリスチャンは、こうしてモスクワの学術と文化生活について父に定期的に報告した。著作としては、1805、06年に二巻本の『国家経済の基礎』の刊行が知られている。ロシア語で書かれた最初の政治経済学の教科書で、そこではアダム・スミスの学説も紹介された。ドイツ語版も出版され、1805年、1807年、1810年にはゲッティンゲンに出張している。元々は父との不和故のロシア行であったが、思いがけない成果が生みだされたのである。

1803年秋、シュレーツァーの大学での講義も最後となった。ロシア人聴講生たちはその最後を嵐のような拍手と喝采、そして「ウラー」と叫んだという。こうして「若いロシア人たちの父親」はゲッティンゲン大学の舞台を降りたわけだが、モスクワではもう一つの役割が待っていた。1804年モスクワに歴史協会という学術機関が設立された。正式名は「ロシアの歴史と古事のモスクワ協会」で、19世紀半ばにモスクワ大学歴史文献学部の付属機関とな

る。分厚い研究雑誌（Chitennie）を定期的に刊行して、ロシア近代歴史学において重要な役割を果たしたことで知られる。初期の活動はさほど活発ではないが、バンティン・カメンスキー（1737-1814）、ムーシン・プーシキン（1744-1817）、マリノフスキー（1762-1840）、カラムジーン（1766-1826）、府主教エヴゲニー（1767-1837）、という錚々たる五名のロシア人学者の他に、シュレーツァーが加えられた。唯一の外国人シュレーツァーは、すでに指摘したように、『ドイツ語訳原初年代記』全5巻を完成させていたが、すでに70歳であった。前年に「修史官」となり、間もなく『ロシア国史』の刊行を始めるカラムジーンは44歳である。シュレーツァーはいわば顧問的な役割であるが、彼がこれを最高の名誉と感じたことは推測に難くない。1809年11月9日、ロシアはその「情熱的な崇拜者」を失った。享年74歳であった。<sup>18</sup>

## 結びに代えて

すでに述べたように、ピョートル大帝の要請を受けたライプニッツは科学アカデミーの開設を提言した。1725年末、アカデミーが設立されロシアは文化の制度化に向けて大きな一歩を踏み出した。大帝によって解き放たれた建築や芸術、あるいは習慣や衣服等の「西欧化」の嵐はロシアの人びとに強いカルチャー・ショックを及ぼしながら進められた。モスクワの伝統的な信仰と感覚・思考のロシア人が新首都ペテルブルクの中央公園に据えられた女性の裸の彫像をみたときの驚きはいかばかりであったらう。

文化の制度化についてのライプニッツの提言はロシアの地理、土壌、気候等の調査と研究など広汎な分野に及ぶもので、科学アカデミーはロシア辺境に何度も探検隊を派遣して、「啓蒙プログラム」を実施した。ベーリングによる二度の海峡探検、歴史家ミュラーのシベリア探検、グメリンのロシア南東部探検、クラシェンニコフのカムチャツカ半島探検等が挙げられる。<sup>19</sup>

だが調査主体はアカデミーではなかったし、辺境だけに向けられていたわけではない。政府各部署も国内各地に向けてアンケート調査を実施した。

地方都市、商人、商店について、マニユファクチャー、工場について、県ごとの穀物収穫量と価格の調査について、凶作の原因調査について、土地境界調査について、定期市について、18世紀の後半にはほとんど毎年のようにアンケート調査がおこなわれた。それらは外国人による学術的な探検調査のように帝国内部に住む諸民族の風俗習慣、衣食住、あるいは史蹟などに強い関心をしめすことはなく、明白に国家的利益、資源等の社会経済的な目的をもっていた。だがそうした調査のなかから、全国的な地誌の作成という重要な成果も生みだされた。このようにして、ロシア人は自分たちの国の内実を具体的に知りはじめたのである。<sup>①</sup>

そしてロシア人は自分たちの歴史も知りはじめた。ロシアの古い時代について書かれた外国人の著作を批判的に分析する試みが生まれた。ロモノソフ、シチュエルバートフ、ボルチン等の仕事がそれである。カラムジーンが詳細な注釈を付した『ロシア国家史』執筆に取りかかるのは19世紀初めのことだが、下地は既に整えられつつあった。

## 注

- ① 岩間徹編『ロシア史（新版）』（世界各国史4、山川出版社 1979）、第5章第4節「18世紀ロシアの社会と文化」のなかで、鳥山成人氏は「西欧化とドイツ化」という項目をたてて、「18世紀ロシアの西欧化は、エカテリーナ二世時代の宮廷文化を別とすれば、実質的にはドイツ化であった」、と指摘した。だが筆者が担当した『新版ロシア史』（2002）ではこの観点が薄く、的確に引き継がれたとはいえない。以下の覚え書はその点の部分的補訂でもある。
- ② Kovrigina, V.A. Nemetsukaya sloboda Moskvyy i ee roli v russko-germanskikh kontaktakh pervoi poloviny XVIII v. —Karp, S.Ya (otv.red.) Russkie i nemtsui. Vstrecha kul'tyr. Moskva, 2000 S.189-202. 本書は1996年にモスクワで開催された第二回ロシア・ドイツ18世紀研究会議の資料集にもとづく論集で、29名が寄稿している。
- ③ Isabel de Madariaga, Politics and Culture in Eighteenth-Century Russia. Collected Essays, London, 1998 pp.262-283. 橋本伸也『帝国・身分・学校—帝政期ロシアにおける教育の社会文化史—』（名古屋大学出版会、2010）、第3、4章参照。
- ④ Sharkh, K. Ekaterina II i Germaniya. 先述の2000年論集所収の小論だが、次の大著に基づく。Scharf, C. Katharina II., Deutschland und die Deutschen. Mainz, .

1995 570 S.

- ⑤ 別府昭郎「近代大学としてのゲッティンゲン大学」『大学論集』（広島大学高等教育研究開発センター）、第35集、2005 大西健夫『ドイツの大学と大学都市—月沈原の精神史—』知泉書館、2016、特に第3章参照。
- ⑥ アッシュとアッシュ・コレクションについては、以下の諸文献を参照した。Buchholz, A Die Göttinger Rußlandsammlungen Georgs Asch, Ein Museum der russischen Wissenschaftsgeschichte des 18. Jahrhunderts. Gießen, 1961 Hauser-Schäublin, B Krüger, G (ed.) Sibirien und Russisch-Amerika. Kultur und Kunst des 18. Jahrhunderts, München, 2007 伊藤恵子「ドイツ資料から見た大黒屋光太夫—アッシュ・コレクションの背景—」『比較文学研究』65号、1994年7月、88-117頁。著者によると、この論文は『窓』（ナウカ社）85、86号（1993年6、9月）に寄稿した「アッシュ・コレクションの背景—光太夫の記録を残した人々—」上・下の「補訂稿」である。
- ⑦ 平川新『開国への道』（小学館日本の歴史）第12巻、2008年。口絵6「はじめての日口会談」参照。
- ⑧ シャバリンという人物について、この段階では明らかではないが、1792年9月に大黒屋光太夫等3名の日本人漂流をのせて、オホーツクから根室を経て松前に向かったエカテリーナ号にも「水先案内人」として乗船した。15年前の経験を買われ、高額で雇われたのである。その後纏められた諸資料によると、名前はドミトリー・ヤーコヴレヴィチ・シャバリン、「人家凡そ三百戸程」の「繁華の地」オホーツクの人で、「六十余のもの也」。「幾分かクリール語（千島アイヌ語のこと）を解する」とある。このときの彼の年齢は40代半ばであろうか。山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集』（日本評論社、2003）第3巻、所収の「光太夫談話」等参照。
- ⑨ 奥平武彦「ギョッチンゲン大学図書館の日露支関係文書」『書香』（満鉄各図書館報）45号、1932年12月。奥平武彦（1900-1943）は当時の京城帝大教授で、大正デモクラシーの政治学者、吉野作造（1878-1933）の弟子に当たる。吉野は周知のように明治文化研究会に参加して、『主張と閑談』第二集（1924年9月）に「露国帰還の漂流民幸太夫」を書いている。奥平が大学図書館で調査したのは1929年7月のことだが、彼にも吉野と同様の関心があったのかもしれない。
- ⑩ なお会談自体は樺太・千島交換条約（1875）の締結のためにペテルブルクを公式訪問した榎本武揚以来、ひろく知られていた。ポロンスキー著、榎本武揚、他訳『千島誌』（原著の刊行は1871年）。『北方未公開古文書集成』第7巻、1979年。最近の研究としては、コラー・スサンネ「安永年間の蝦夷地における日露交渉と千島アイヌ」『北大史学』42号、2002。同「安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景」『スラブ研究』51号、2004等がある。
- ⑪ 草光俊雄「『好奇心』と『探求心』—啓蒙主義と博物館の思想—」、草光俊雄、他『ヨーロッパの歴史と文化』（地域文化研究）、放送大学教育振興会、2007、所収。伊藤恵子、前掲論文、107-109頁。伊藤は「幕末期の日本コレクションで有名なシーボルトのように、アッシュも手に入った品々をすべてゲッティンゲンへ送ったらしい」、「アッシュの寄贈品は内容の多様さという点でも、シーボルト・コレクションをしのぐ」、としている。比較の基準が不明だから判断できないが、ヨーゼフ・クライナーは次のような興味深い事実を指摘している。シーボルトは赴任前「バタビアで、ゲッティンゲン大学の出身で、学生時代シーボ

ルトの父親の親友であった総督ファン・デル・カペレン男爵にたいへん好意をもって迎えられ、長崎出島のオランダ商館付きの医官に任命された。また同総督の強い希望で、日本に滞在中に自然科学をはじめ、人文・社会科学から歴史に至るまでの日本の総合的かつ学際的な研究を委任された。「ケンペルやツーンベルクの後継者として選ばれたのである」。クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャパン—シーボルト父子の見た日本』（NHKブックス、1998）11頁。シーボルトの父親とはヴェルツブルク大学医学部教授クリストフ・シーボルト（1767-1798）のことで、若くして亡くなったが、クライナーによると、彼もゲッティンゲン大学の出身者であるという。

- ⑫ ゲオルク・イッガース、中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』（晃洋書房、1986）、第1章。原著は1975年の刊行。早島瑛「社会と国家のはざまで」、竹岡敬温・川北稔編『社会史への道』（有斐閣、1995）、所収。
- ⑬ Black, J.L. G.F. Muller and the Imperial Russian Academy. McGill-UP., 1986 シュレーツァーについては岡崎勝世の詳細な考察がある。「ドイツ啓蒙主義歴史学研究—A.L.von シュレーツァーにおける『普遍史』から『世界史』への転換」『埼玉大学紀要』（教養学部）47巻2号（2011）。門外漢である筆者が付け加えることは何もないが、唯一ロシアとシュレーツァーの深い交流については触れておらず、この点について幾つか述べることになる。
- ⑭ 「記述 (opisaterinyi) 統計学者」としてのシュレーツァーについては、浦田昌計『初期社会統計思想研究』（御茶の水書房、1997）第6章の「シュレーツェルによる国状学の展開」参照。この論文は『経済学会雑誌』（岡山大学）3巻1号（1971年6月）に掲載された「A.L.Schlözerの統計思想」のタイトルを改め所収された。以下の記述はこの貴重な文献による。
- ⑮ 大西健夫、前掲書208頁。
- ⑯ Cherepunin, L.V. A.L. Shuletsier i ego mesto v razvitie russkoi istoricheskoi nauki. —Cherepunin, L.V. Otechestvennyie Istoriki. XVIII-XX vv. M., 1984 S.45-73. Djakov, T. On podgotovil pazvitie istoricheskoi nauki XIX veka. Avgust Lyudvig Schletsuer. —Istoriki Rossii, XVIII – nachalo XX veka. M., 1996
- ⑰ Andreev, A.Yu. A.L. Shuletsier i russko – nemetskie universitetskije svyazi vo vtoroi polovine XVIII – nachale XIX v. —Istoriya i istoriki. M., 2004 S.136-157. 他に次も参照。Andreev, A.Yu. Moskovskii universitet v obshchestvennoi i kылiturnoi zizuni Rossii nachala XIX veka. M., 2000
- ⑱ 「ロシアの歴史と古事モスクワ協会」については、Demidov, I.A. Ishutin, V.V. Obshchestvo istorii i drevnostei rossiiskikh pri Moskovskom universitete. —Istoriya i istoriki. 1975. M., 1978
- ⑲ Aleksandrovskaia, O.A. Stanovlenie geograficheskoi nauki v Rossii v XVIII veke. M., 1989
- ⑳ Rubinshtein, N.L. Topograficheskie opisanie namestnichesti gubernii XVIII v. —Pamyatniki geograficheskogo i ekonomicheskogo izucheniya Rossii. —Voprosi Geografii. Sbornik. 31, 1953 S.39-89.